

回想 シベリア抑留記

新潟県 平原 敏夫

松輪島（千島）からシベリアへ

昭和二十（一九四五）年八月十五日、私は千島の松輪島で終戦を迎えた。松輪島では幾度か艦砲射撃を浴びせかけられ、頻々と空爆にも見舞われた。それらはすべて一方的に攻撃されつ放しの戦闘であつて、敵はことごとく米軍であつた。

なのに同月二十五日、松輪島にソ連兵が上陸して来た。私たちには全く夢想だにしていなことがあつた。

約一カ月後の九月二十六日、私たち守備隊はソ連差し回しの船で松輪島を離れた。

船は北海道へ向かっていると私たちは信じていた。ソ連人乗組員からも、「ヤポンスキー（日本人トウキョウ）」と声をかけられた。東京は日本の代名詞で、地理的に当然北海道のどこかを指して

いると思ひ込んでいたのである。だが二十八日夕刻、船が錨を下ろしたところはソ連領沿海州の間宮海峡に面したソフガワニ港であつた。もちろん当時の私たちは、そこがどの何という港かなど知る由もなく、翌二十九日未明、同港に上陸、ソビエト領土に第一歩を印したのであつた。

濃い霧の流れる中、鉄道の信号灯らしい橙色の灯が淡く点滅していた。初めて目にした広軌の鉄道のばか広い、どっしりした凄く太いレールが、ひんやりと鈍い光を放ちながら霧の中へ延びていた。その霧の中から忽然と現れ、鉄道の線路伝いに無言のままスーツと消えて行つた。幾人かの女性労働者がカンテラを下げ、つるはしを肩に、男性と見紛う服装をしていたのを覚えている。

五十トン積み？ の大きな有蓋貨車に七十人ずつ乗車、松輪島から持ち込んだ背嚢を敷き詰めた上に座り込むと、車両の中は結構窮屈であつた。間もなく列車は発車。牽引するとてもなくでかい蒸気機関車にも私たちは仰天した。燃料は石炭

でなく薪で、火の粉を忙しく吐き出し、時々ピー
ピーと汽笛をうるさくわめき散らしながら息せき
切って走行するのであった。途中駅舎らしい建物
の見えた集落に停車していた時、貨車の床に変な
音がするので車内に敷いていた背嚢を除けてみる
と、車両の床に穴が開けられ、私たちが松輪島か
ら携行してきた物が盗まれていた。それは飯盒で
あったり水筒であったり、まさに手当たり次第と
いう状態であった。

戦勝国とはいえ当時のソ連は、西部戦線でもこ
とん追い詰められ、連合軍の反攻に支援されての
勝利であって、疲弊極に達し、その厳しさは私た
ちの想像をはるかに超えたものようであった。
私たちを松輪島から運んだ輸送船、化け物のよう
な図体のかい蒸気機関車も、アメリカ建造、製
造のものであった。

ソフガワニを発車した列車は度々停車し、その
都度燃料の生木の薪を積みだし、給水しながら、
移送人員を減らし減らし進み、約三十五時間を費

やして一四二キロを北上、鉄道の起点ピワニーか
ら三〇八キロの地点、一三〇収容所に到着、第三
大隊の第九、第十中隊を主力とした約五百人が下
車を命ぜられ収容された。九月三十日、小雨が降
っていて冷え冷えと夕闇の迫った午後五時頃と記
憶している。

注 ソ連（ロシア）極東の主要都市コムソモリ
スクから、アムール（黒竜江）を隔てた対岸は河
港の町ピワニーである。

この町を起点に四五〇キロ、ソフガワニに至る
間の鉄道沿線に点在した幾つかの収容所を移動し
ながら、私たちは様々の作業、ノルマ（割当作業
量）に追い立てられてきたのである。

収容所

収容所は、直径八〇センチ、高さ五メートル
程の揃った丸材をびっしり立て連ね、その外側数
メートルに有刺鉄線を張り巡らせて二重に柵で囲
まれていた。細い丸材を隙間なく立て並べて作ら

れていた柵は、いかにも森林資源の豊富なシベリアならではのものであった。柵の四隅にやぐらが組まれており、その上にしつらえられた小屋の中に、銃身の長い狙撃銃を構えたソ連兵が監視の目を光らせていた。

柵内には、これから私たちが起居する丸太造りの、粗末な建物幾棟かが寒々と並んでいた。宿舎内は、真ん中に通路をとり、両側に高さ四十〜五十センチ、その上に更に一二〇〜一三〇センチくらいだったと思う。二段に厚板が敷かれ、窓が少なく、それも小さくて明かりが入りにくいため陰湿だった。貧しいとしか言いようのない様子が、僅かに記憶に残っている。

所属隊、班ごとに二つ二つした体を寄せ合せて、それでもなんとか頭足交互までする必要のない、とにかくひっくり返れるだけのスペースが割り当てられた。そこが私たちのその夜からのねぐら、居住する場のすべてなのであった。

十月一日夜、ソ連側から初めて食事が支給され

てきた。粟だったと思う。どろどろに炊き込んで、食油と塩で味付けしたもの（ロシア語でカーシヤといい、雑炊や粥という意）が飯盒のふたに軽く一杯、それに黒パンが少量、と私が帰国後メモったノートに記されている。

食事が支給されだすと早速作業も始まった。

作業は山林の伐採、鉄道工事、官、兵舎の建築などさまざままで、幾つかのグループに分かれて行われた。

作業に出るようになって、というより私たちが入ソ後彼らソ連人から初めてかけられた声は、「ダワイ、ダワイ（急げ急げ）」と、時にはこぶしを振り上げての罵声であった。

「ベストラダワイ（早く、急げ）」、「ダワイラボート（急げ、作業だ）」など、抑留者の誰もがこの「ダワイ、ダワイ」であおられ、こき使われてきたのである。そうして、帰国後五十数年を経た今日でもなおシベリア抑留生活体験者の皆の耳の底にはつきり残っていて忘れることのできないロシ

ア語が、この「ダワイ、ダワイ」だと思う。

機関車用の薪割り

私が最初に割り当てられた作業は、蒸気機関車用の薪割りであった。

直径三十〜四十センチのエゾ松が多かったのだが、木はシラカバでも何でもよかった。その辺の立木を手当たり次第に切り倒し、一メートルずつに刻んで二つ割りにするのであった。倒した樹木の枝葉の焼却などの後始末もあって、こういう仕事はまるつきり初めての私には、結構きつい作業であった。のこぎりは二人用で、押ししても引いても切れるような歯並びになっていた。

タポール（手斧）を使うのも初めての私は、空振りをして自分のひざ小僧を割りそうになり、肝を冷やしたことも再三であった。一メートルずつに切った丸材を台の上に立て、それに力いっばい斧を打ち込み、丸材ごと頭の上まで持ち上げ、斧を下にして勢いよく台に打ちつける。そう

すると斧を振り下ろす力に丸材の重さも加わって、その丸材はサクッと二つに割れ、その度にヤニの何か生臭いような匂いが鼻頭をよぎるのであった。しかし水分をいっばい含んだ生材はなかなか重く、一日のラポート（労働）を終えて宿舎にもどり、寝台に横になると膝や腰、肩が痛かった。

一人一立方メートルだったと思う、ノルマ（割当作業量）があった。入ソ当時の私たちはまだ健康体だったので、早々とノルマを達成、定刻前に作業を終了、宿舎に引き上げていた。それが裏目に出、ノルマは間もなく一・二立方メートルに上積みされてしまった。

機関車は生木の薪を焚いて走るので、暗くなつて走行する列車はパチパチ火の粉を吐き出しながら、時にはメラメラッと火炎さえ噴き出し、まるで火事そのまま駆けて行くようで忙しくにぎやかな、それはそれは勇ましいものであった。

初めての犠牲者

収容所生活に入ってから一月ほどたち、寒さもいよいよ本格的になってくると、その寒さに耐えて行くだけでも大変な量のエネルギーを消耗した。日ごとに体力の衰えが自覚されるようになってきた。そんなある日、恐れていた事故、それも死亡事故がついには発生した。被災者は隣中隊の兵隊で、伐採作業中、倒れる大木を避けきれなくての災難であった。顕著になってきた体力の衰退が、彼の受難の原因のすべてであった。

その夜、宿舎内の全員で通夜を営んだ。位牌がつくられ、大根の味噌漬け（誰かが松輪島から持って来ていた）数切れが霊前に供えられた。供物はそれだけであった。それでも折よく宿舎に僧職の方が居合わせ、お経を上げて仏を弔うことができた。読経の抑揚ある独特のうら悲しい声を聞きながら、どうなっていくのだろう、と私たちはこれから、不安と、終戦後の様子は少しも分からない故郷、生家のこと、肉親や知友人たちの消息な

ど、ゆらゆら煤を吐き出しながら揺れる松ヤニを燃やす手製のランプのわずかな明かりの中にうずくまって、額を寄せ合つての心細い通夜であった。当時の様子は忘れられない。しかしこうした真似事のようなお弔いができたのも、この時が最初で最後であった。

欠食の一日

昭和二十年暮れも押し迫つたある日。

シベリアでは粉雪が舞いこそすれ一度に大量の降雪を見ることは極々まれであった。なのにその日は、前日来降り続いていた雪が二十〜三十センチも積もり、道路らしい道路が無く鉄道線路が唯一の交通路で物資の補給路でもあった。その線路が埋まってトロツコが引けなくなり、ために交通途絶、糧秣の補給ができなくなってしまった。ちなみに、当時収容所に支給される食料は、毎日一日分ずつ（土曜日は二日分）、数キロ離れた地区本部にある倉庫まで、担当ロシア人に引率されて使

役を割り当てられた何人かで受領に向向いていたのである。したがってその日は欠食、食べ物が無いのだから作業は休みになった。することがないのだから仕方なく雪を溶かして湯を沸かし、それをすすり空腹を紛らわし、堪えながら宿舎でごろごろしていた。この先どうなるのだろう。何ともなんとも心細く、長い長あい一日であった。

身体検査

定期的に行われたのかどうか明確でないが、時々身体検査が、とても変わった方法で行われた。身長、体重、視力などを測定することも、医師が聴診器で胸や背中を診ることもないのであった。私たちは列を作り次から次へと、下帯も外し素っ裸でソ連人医師の前に行き、くるりとその医師に尻を向けるのであった。医師は二度三度尻の肉をつまんで健康状態を判断し、一級は重労働（該当者は居なかった）、二級は通常作業、三級は軽作業、四、五級はオペといつて休養させるグループに仕

分けるのであった。時に担当医師が女性だったことがあった。その時はさすがに皆、しょんぼりした男性のシンボル、それも毛虱の発生予防ということで腋毛と共に陰毛もすっきり剃り落としていたので、まさに素っぱんの男根をぶら下げて、そわそわと落ち着かなかった。

身体検査の都度収容所を転々と移動させられ、それが即編成替えとなつて、新発田、松輪島以来の戦友たちと離れ離れになり、段々心細くなつていくのであった。そうしていつの間にか収容所内は、樺太、満州（現中国東北部）などから連行されてきた軍人軍属はもとより、満州からは満蒙開拓団で渡満入植したいわゆる地方人（軍籍のない人たちをこう呼んでいた）の親子兄弟等など、各地からさまざまな境遇、環境にあつた人たちの集まりになり、厳しかった軍の規律はすっかり影をひそめてしまった。

身体検査の結果による移動は、もちろん健康管理に目的があつたのだろうが、それより各地で行

われている作業の進捗状態をにらみ、さらには、日本軍の機能の解体も計算されていたのかも知れない。

こうした中で気の毒だったのは、親が子のため、息子が父親を気遣うあまり、食べ物、たばこなど、ついつい他人の物に手を出してしまうという事件（というより当時は事故というべきか）が頻発したことである。

入ソ後初めて身をもって知った恐怖ともいえる寒さと、四六時中の心もとないひもじさですっかり萎縮してしまった私たちは、体力と共に思考力、物事に対する正悪の判断力さえ失いかけていたのである。

命の糧黒パン、喫煙者にとっては貴重なたばこ、その外に狙われたのは腕時計であり万年筆であった。時計や万年筆は、ソ連人からパンやたばここと交換してもらうためなのであった。たばこはマホルカという刻みたばこで、吸うととても辛く苦いのだが、何ともいえない強い香りが、喫煙者を我

慢ならなくしたのであった。

当時、私たちにかかわったソ連人、監視兵等にとって、移送、抑留されてくる日本人のすべてが腕時計を持っていたということは、大変な驚きであったようだ。元流刑地ということのせいか、獄舎らしい建物も散見され、囚人らしい人影もよく見かけた。そんな当時の彼の地での彼らの生活は、衣、食、住ともに粗末な、全く貧しいの一言に尽きるものであった。交換して得た腕時計、万年筆は、彼らの満足感、戦勝国民という優越感を結構満たしていたようであった。彼らのそれらを手にしたときの無邪気ともいえる笑顔が、今でも思い出される。盗難事件、事故？が相次ぎ、ついに親子兄弟が意識的に離れ離れにさせてもらったり、父親が息子が身体検査の査定を無理に一ランク上げてもらい一緒に移動して行ったりともに残留したりということもあつたと聞いている。

バラス降ろし

疲れきった体を横たえみる夜毎の夢……。

遠い故郷の懐かしい山河のたたずまい、それとも愛しい妻の黒髪の匂いか、かわい子供たちの赤いほっぺの微笑みか、私たち独身者はあんこのはみ出しそうな大福餅の山。そんな一時の安らぎの中、遠くからズシーンズシーンと、重くそれについてリズムカルな列車の近づく音が伝わってくる、皆が一遍に目覚め闇の中の一点を見据え、息を殺して列車の通過を祈るのであった。しかし、収容所の近くでドッドドツ、キーキーとブレイキがかけられて列車が止まり、ピーピー汽笛が吹き鳴らされると、いつの間にか現れた作業監督がむちを振り振り、「ダワイ、ダワイ（急げ急げ）」とわめき散らしながら、宿舎内を早足で歩き回っているのがあった。

列車は何両編成だったろう。でっかい五〇トン積みの無蓋車はバラスを満載してきており、私たちは日常の作業にバラスしてそのバラス降ろしの

作業に駆り出されるのであった。

大抵機関車は後ろ向きで車両を引っ張ってきており、その機関車のヘッドライトの明かりを頼りに作業は進められるのであった。扉のくさびの抜き取りから作業は始まり、つるはしの片方をくさびの底に当てがい、いま一方をハンマーでたたき上げるのであるが、重いバラスがずっしりと扉を押し立て、くさびはなかなか抜けなかった。

カーン、カーンと金属が金属を叩きつける脳天に突き刺さるような甲高い音が、車両の数だけ線路に沿って響き、大気を震わせまだ明け切らない天空にこだまし消えて行くのであった。手の空いている者は貨車のバラスの上によじ上り、少しでも早くくさびが抜けるようにと、スコップを縦に車体の扉に引っかけ、内側に引き寄せ踏ん張るのであった。それでもくさびはなかなか抜けず、扉は一向に開かなかつた。でも時には急に抜けて扉が開き、足場になっていたバラスが崩れ、一緒に地面に叩きつけられることもあった。

後日聞き知ったのであるが、同期兵だった某が、扉が開いてバラスと一緒に投げ出されたとき、車体と扉のわずかな隙間に片足を突っ込んで宙ぶらりんになり、複雑骨折の大怪我で直ちに入院、遂に片足は切断せざるを得なかったということだ。何とも何ともお気の毒なことであった。

こんな危険もついてまわって、バラス降ろしの作業は繰り返し繰り返し、結局鉄道線路の仕上げ工事が完了するまで、それに必要な量のバラスが運び込まれ、その都度私たち、どこかの収容所の同僚たちが、声もなくそれを降ろす作業に駆り出されたのである。作業を終え疲れきった体を引きずるようにして帰途に着くころ、ようやく東の空が白みかけ、宿舎に戻って落ち着く間もなく、また一日の作業が「ダワイダワイ」と始まるのであった。

鉄道工事

入ソ当時、地面に直に枕木を置き、その上にレ

ールを並べただけのような鉄道の仕上げ作業が、私たちが収容された地区のメーン作業であったようだ。私も再々従事してきた。

広軌の太いレールを、何人かてこにぶら下がるようにして持ち上げ、その下に私たちが動員されて台車から降ろしたバラスを、打ち込み押し込み、もつと大勢でボール（金棒）を線路の下に差し込み「せーの」「よいしょ」と一斉にレールを右に振り左に戻し、枕木も一部取替え犬釘を打ち直すなどして、曲直の線も美しく鉄道工事は逐次仕上がっていった。そうしてついこの間まで生木の薪を焚いて火の粉を忙しく吐き出しながら息せき切つて走っていた機関車、列車は、石炭で勢いよく疾駆するようになっていた。

沿線に点在した丸太造りの鉄道官舎も、逐次私たち抑留者の手で建て替え新築整備が進み、その機能を倍加し、勤務する彼らの生活環境は著しく改善されたはずである。新築の駅舎は角材を使った本格的なもので、ここでは大工さん、とび職、

それらの経験者が重宝がられ、彼らの腕の振るいどころ、見せどころでもあった。

塩分の全く無かった三日間

伐採、藪だし（山で切り倒し六メートルずつに切断した丸材を、馬にひかせた二輪車に細い方を鎖でくくりつけ、馬の尻をたたきたたき、山を下って道路に面した集積場まで運び出す）作業に従事していた時のことである。

三日間全然塩分の無い食事しか支給されなかったことがあった。初日は全然塩気のない食べ物をただ口を動かしてお腹に送り込むだけ、一日の中で一番楽しい食事時が全く無味乾燥、まさに味気のない時間になってしまった。それでも一日目はまだ体内に前日までの体力保持に必要な塩分の蓄えがあったからなのだろう、上げ下げする手足が随分と重く、全身が気だるく感じたけれども、何とか作業は消化することができた。

塩分の補給がまる一日途絶えた明るる二日目に

なると、もう体がいうことをきいてくれなかった。毛穴汗腺が紫色に腫れ上がり、身体中の皮膚がザラザラして自分の体が自分で不気味であった。栄養失調症状が日、一日加速、顕著になったのである。

次の日、三日目になると、右、左、片方ずつ両手で持ち上げてやらないと足が前に出ないようで、少しでも体を動かすのが大儀になり、口をきくのも億劫になってしまった。そんな状態の中で、「早く、早く帰りたい故郷に」という思いだけが、思考力などひとかけらもなくなった頭の中でクルクルと、ただクルクルと回って止まらないのであった。

三日間の塩の欠配による塩分の摂取ゼロは、当時の私たちの既に弱っていた体力、気力をも一層衰弱させ、栄養失調症状を倍加進行させたのであった。

塩分の過度な摂取は要注意、は常識である。

だが塩分の補給の全く途絶えた三日間は、肉体

労働のノルマ（割当作業量）に追われていた私たちには、まさに拷問を受けているにも等しい日々であったのである。飽食の時代と言われている現在、とても考えられない、シベリア抑留生活なればこそその一こまといふべきか。

後日知ったのであるが、私たちに塩分の全然支給されなかった三日間、収容所で使っていた馬には結構岩塩が与えられていたということであった。私たちに支給されていた塩もやはり岩塩であった。つまり当時私たちにかかわっていたソ連人にとつて、抑留者の私たちの健康・員数管理より、馬匹のそのほうがより大切であったということである。

せっけん水を飲む

当時部隊の中で一番若年で独身者の私、同期兵は、ひもじく寒く、毎日の作業がたらく苦しいから早く帰りたいのだが、年配者、所帯持ち戸主の方々は、敗戦後の家郷の様子、家族肉親縁者の安

否消息、家業、生活のことが気掛かりで気掛かりで、その心労は大変なものようであった。

本格的なダモイ（帰国）が近く、それも体力の衰えている者から順という情報が流れきた。

身体検査が行われると思われる前日、洗濯用のせっけん（主原料が魚油で独特の鼻もちならない匂いが強く、青色でドロツとした、使用後はとても嫌な匂いがいつまでも、洗った物や、ゴシゴシやった両手から消えなかった）を水で溶かし、何とも飲みにくいものだから鼻をつまんで一気に飲み下すのである。そうすると便所にしゃがみ込んだまま動けなくなり、お腹の中、更に体内の水分まで排出されて脱水状態になり、こけた頬が更にこけ、眼球は瞳孔の奥に引っ込み、人が変わったような面相になってしまふのであった。しかし身体検査の予測日が狂うとさあ大変、せっけん水をあおった皆さんは体力の急激な衰えとともに、本当に帰れるのだろうか、いつになったら、とすっかり弱気になり、精神的にも参って、周囲の者が

つらくなる程しよげかえってしまふのであった。無理にそんな身体にして、シベリアでの回復は難しく、帰国後も果して元の健康体に戻ることができたのだろうか。

どうしても帰らねば、一日も早く、の止むにやまれぬ思いからの行為ではあつたろうが、何とも痛ましい、そんな幾人かの人たちをどうすることもできないまま私は見てきた。

極寒

銀粉をまき散らすようにチカチカ光を放ちながら寒さが降ってきた。凍土からキリキリはらわたにしみる寒さが這い上がってきた。吐く息がすぐ氷の微粒になつて付着し、眉毛が白くなり、まつ毛がまばたくと。パチパチ音がしそうにねばつこかつた。呼吸の度に鼻から二本の白い棒が現れては消えた。そうして鼻の穴がモゾモゾと痛がゆく奥の方がヒリヒリして苦しかった。その寒さは脳髓を何かにつままれてでもいるようで、体中ガタガ

タ震えがきてなかなか治らないのであつた。

朝目が覚めたら同室の同僚が冷たくなつていた。会話中静かになつたと思つたら、がくと首を落として、某が事切れた。事故死もあつたけれども、栄養失調による衰弱死がほとんどで、寒さが厳しくなると共に死者は増えていった。

私の収容されていた地区では、死亡者は近くの病院に運ばれ、解剖、縫合のうえ埋葬されることであつた。病院に送る便が無いと幾日幾日も宿舎の出入口の片隅に、幾体ものカチンカチンに凍つた遺体が井桁に積まれていた。背筋の凍るような光景であつた。シベリアの冬、大自然の厳しさ、猛威は、衰弱しきつた私たちの身体に情け容赦なく、時には暴力ともなつて襲い掛かつてきて止まないのであつた。

戦争は終わったのに、なぜ殺されねばならなかつたのか

いつも腹が減つていた。作業は連日、過酷なノ

ルマとカンボーイ（監視兵）の構えた自動小銃の銃口に追われ、猛烈な寒さに怯えながらの日々であった。頭の中は食い物のことと帰りたい早く、一日も早くの思いの外何もなかった。こうした中で、六万人もの戦友、同胞が無念、本当に無念亡くなつて逝つた。どんなにかどんなにか心を残しての最期であつたことか。しかも未だに、万を越す死没者の遺体が、超広大なシベリアの山野のどこかに放置されたままと聞いている。

戦争は終わったのにどうして、なぜ殺されなければ（と言つてよいだろう）ならなかったのか。皆さん、皆さんの遺族、肉親の方々の胸のうちを思うと、昭和二十三年六月幸運にも生還、年金生活者ながら毎日が平穩、無事であればある程胸が痛む。

戦争は遠くなつてしまつた。しかしシベリア抑留の悲劇、惨劇、その真実は永久に消えることはない。

【執筆者の紹介】

住 所 新潟市白山浦新町通

生年月日 大正十一年九月二十九日

昭和十八年九月二十八日 臨時召集により新発田

部隊に入隊

昭和十九年二月十七日 新発田を出発

昭和十九年三月十三日 千島松輪島に上陸 北方

軍 勲第一一九〇五部隊

歩兵第百五十八連隊第三

大隊第九中隊

昭和二十年八月十五日 終戦

昭和二十年九月二十六日 松輪島を出航

昭和二十年九月二十九日 シベリア沿海州ソフガ

ワニ港に上陸 以後何

カ所かの収容所を転々

と移動しながら、鉄道

工事 伐採作業等に従

事

昭和二十三年六月二十一日 引揚船永徳丸にて

ナホトカ港を出航
第二十一梯団 一九

九八人

昭和二十三年六月二十四日 舞鶴港に上陸

昭和二十三年六月二十八日 新潟県加茂町（現加

茂市）の生家に帰着

（新潟県 柴沢 正雄）

私のシベリア記 タイガーの冬

富山県 石川 正一

シベリア鉄道の支線の小駅スイソエフカの線路脇で一夜を明かした私たちマラリア患者の三人は、寒さに震えながら一夜寝床にしていた枯草を上手に燃やし、携帯していたコメをとがないまま、昨夜以来降り積もっていた雪を融かした水で炊いた。こうしてどうにか飯にありつくことができた。

さきにクラスキーノを出発した私の所属する見元大隊の五百人は夕刻前記のスイソエフカに着いた。本隊はそのまま行軍して木材伐採現場であるタイガーを目指して先行していたのである。

その夜、私たちマラリア患者の三人は枯草をかき集め部厚いベッドを作り、すべての衣服を着、防寒外套をはおり防寒帽で顔を覆いなんとか眠りにつくことができた。

翌朝ひどい寒気で目が醒めた。寝惚けまなこを